

刊行にあたって

パーシャルデンチャーの設計は、支持、把持、維持をベースに考えられ、その考え方は100年前より大きく変わってはいない。

そして、かつてはパーシャルデンチャーは歯を壊すのか、それとも守るのかで議論され、残存歯にとって悪であるとの考えも拡がり、部分欠損症例におけるパーシャルデンチャーは、すべてインプラント補綴に置き換わるであろうとの予想もされてきた。

ところが、現代もパーシャルデンチャーはなくなっていない。そればかりか、日本においては高齢者が増えており、部分欠損症例にパーシャルデンチャーを製作する機会が増えてきている。

超高齢社会の日本において、今後も高齢者数は増える一方で、無歯顎者率は減少すると予想されている。高齢者の元気の源は「自分の歯で噛めること」であり、歯を残せるようになったことは、歯科医師としてもたいへん喜ばしいことである。しかし、歯があることで、部分欠損の患者では残存歯を支点に義歯が回転して噛みにくくなった結果、難症例になることもある。

高齢者は今後ますます増加し、その口腔内は部分欠損の期間が長く続く時代となってゆく。われわれ歯科医師は、その欠損補綴装置であるパーシャルデンチャーの質を上げることを考えていかなければならない。

このような時代背景の変化を踏まえて、新しい時代に対応したパーシャルデンチャーへの考え方が必要である。そのためにも、パーシャルデンチャーは機能回復ばかりではなく、残存歯を守り、長持ちすることが求められる。これからは義歯の動きを少なくするための設計や工夫、歯周環境の整備について、さらに追究しなければならないであろう。

本書では、パーシャルデンチャーに関連した分野において著名な先生方にご協力いただき、パーシャルデンチャーにおける臨床の質が“LEVEL UP”するポイントを論じていただいた。

2022年9月

亀田行雄
前畑 香